

日本における木造住宅の移築事例に関する研究 —保存活用を目的とした展示施設への用途変更事例を中心として—

主査 早川 典子*¹委員 高橋 英久*²

木造住宅の移築は、もともとは木造建築に特有の建築技術である。現在は文化財建造物や、それに相当する建造物を保存する目的以外に使われることは少なくなってしまった。日本では野外博物館という言葉の定義は定まっていないが、欧米から影響を受けた日本の野外博物館の役割について考える。次に、木造住宅をひとつの敷地に集めて野外博物館とする施設は、世界各国で見ることができる。このような施設の事例をふまえながら、多様な野外博物館の今後を考える。

キーワード：1) 博物館学、2) 野外博物館、3) 移築、4) 木造、5) 住宅、6) 復原、

STUDIES OF THE RELOCATED WOODEN HOUSES IN JAPAN. - Case Of Converting Old House Into Exhibition Facilities For Conservation.-

Ch. Noriko Hayakawa
Mem. Hidehisa Takahashi

Moving wooden houses are building technique. As rare cases, we use this technique for preserving important buildings. Open air museums's definition is not clear in museum studies of Japan. Japanese open air museums are influenced of Western culture. But, Japanese open air museums are founded as a purpose of preserving. European open air museums are diverse. Each museum is different.

1. はじめに

木造建造物の移築は、木造に特有の技術である。現在は文化財建造物や、それに相当する建造物を保存する目的以外に使われることが少なくなってしまった。

日本では、この技術を生かし木造住宅の保存を目的とした移築が行われ、木造の住宅を移築した展示施設が誕生する。

日本には木造の住宅を移築して、1棟のみを展示施設として活用している事例はとても多い。すべての都道府県に存在している。

この研究では、全国文化財集落施設協議会に加盟する12の野外博物館を中心に訪問の上、聞き取り調査をおこなう。

全国文化財集落施設一覧



図 1-1 文化財集落施設一覧（江戸東京たてもの園 HP より）

2. 野外博物館

2-1 野外博物館とは

地球科学・博物館学を専門とした新井重三氏^(注1)は、『博物館学入門』（1956年 理想社）において野外博物館に触れ、その後「野外博物館総論」1989「野外博物館総論」『博物館学雑誌』第14巻第1・2号合併号において日本の野外博物館の体系と分類を初めて行った。

○資料の展示場所による分類

- ① 屋内展示型博物館…一般的な博物館
- ② 屋外（野外）展示型博物館…家屋・石像・彫刻・船舶など大きな資料を屋外に展示している博物館 例 明治村・川崎市立日本民家園・箱根彫刻の森美術館
- ③ 現地保存・展示型博物館…保存したい資料を動かさずに現地で保存している博物館。

例 加曽利貝塚博物館（千葉市）・風土記の丘

次に、文部科学省『平成 23 年度社会教育調査報告書』によれば、野外博物館とは、戸外の自然の景観及び家屋等の形態を展示する施設を指す。

博物館法上の登録博物館及び博物館相当施設とする野外博物館の数は、18 施設であるとし、博物館類似施設としては100 施設とされている。

2-2 野外博物館の定義いろいろ

- (1) 木場一夫（博物館学） 『新しい博物館』1949年
・野外博物館とは自然及び考古・歴史的遺跡そのものが野外における展示として説明できるもの（環境が説明されるべき対象を提供しているもの）でなければならない（人為的に展示資料をよそから収集し移設した施設は対

*¹東京都美術館 学芸員, *²東京都歴史文化財団 学芸員

象外)

(2) 太田博太郎 (建築学) 「野外建築博物館」『月刊文化財』1965 年 6 月

- ・ 野外博物館としての建築博物館
- ・ 例として「三溪園」「日本民家集落博物館」「博物館明治村」の概要紹介

(3) 日本建築学会 「歴史的建築・環境保全の理念と技法」『建築雑誌』1976 年 5 月

- ・ 野外博物館の例「致道博物館」「川崎市立日本民家園」「博物館明治村」「飛騨民俗村」「百万石文化園江戸村」「日本民家集落博物館」「長崎市グラバー園」の概要紹介

(4) 藤島玄治郎 (建築学)

「野外博物館展示の家」『野外博物館総覧』1978 年

- ・ 移築の条件について触れる
- ・ 野外博物館は自然的なものと人為的なものに分かれる。建築を主体とする野外博物館は人為的なものである。

- ・ 建築を移築するときの条件

移築地は旧位置からできるだけ近く似た環境を持つところ

方位を同じくすること

民家は屋敷地内の諸施設を一セットにしてすべてが移されること

解体調査の上、創建当初の復元が望ましい

(5) 伊藤延男 (建築学)

「日本における野外博物館と町並み保存地区について」『博物館研究』1977 年 1 月

- ・ 民家を収集する野外博物館の問題点を以下のように指摘

- a 不動産である建造物の収集計画の綿密さに配慮すべき
- b 移築工事・展示に際しては重要文化財の移築・修理に準ずる心構えをもつべき
- c 展示・管理に配慮すべき (生活のあり方に沿った展示をする) 例として民具の盗難破損に対しては模造品などで対処しては・囲炉裏には火入れを
- d 経営に配慮を。一般の人を引きつける工夫と効果的な宣伝
- e 建物 1 棟の価値ではなくコレクションとしての価値を認めるべき

(6) 杉本尚次 (民俗学・博物館学)

「フィールドに息づく民家と村落の伝統」『世界の博物館シリーズ』第 14 巻 1978 年

- ・ 日本の野外博物館として「日本民家集落博物館」「日本民家園」「飛騨民俗村」「明治村」「江戸村」「四国村」「風

土記の丘」「町並み保存」を例示

(7) 宮沢智士 (建築学) 「建築の博物館」『月刊文化財』1982 年 7 月

- ・ 建築の屋外博物館の分類

a 民家～近世 「民家集落博物館」「日本民家園」「飛騨民俗村」「四国村」

b 洋風建築～近代 「明治村」「グラバー園」

c 堂塔・書院造りなど～中世・近世 「三溪園」

- ・ 建築専門ではないが建築の保存施設として

a 歴史民俗などの博物館・風土記の丘 「奈良県立大和民俗博物館」

b 旧邸宅の庭園・都市公園 「相楽園」(神戸市)

(8) 鷹野光行 (考古学)

「野外博物館の効用―遺跡を活用する視点から」『お茶の水女子大学人文科学紀要』1984 年 3 月

野外博物館の分類

a 民家など地上の建造物を資料とする野外博物館

b 自然現象を資料とする野外博物館

c 野外彫刻博物館

d 遺跡に立地または近隣して設置された野外博物館

以上のように、日本における野外博物館の定義はさまざまに未だ定まっていなかったことがわかる。

2-3 ヨーロッパにおける野外博物館の定義

1891 年に設立されたスカンセンを発祥とするヨーロッパの野外博物館は、木造住宅ひとつの敷地に移築し展示するスタイルが基本にある。

ICOM (International Council of Museums: 国際博物館会議) は、1946 年に創設された国際的な非政府機関であるが、AEOM (Association of European Open Air Museums: ヨーロッパ野外博物館会議) は ICOM の下部組織として位置づけられている。設立の目的は、野外博物館によってもたらされる科学的、技術的、実践的かつ組織的な体験を各館で情報交換することとし、野外博物館の活動を推進することである。AEOM では、野外博物館の定義を以下のように定めている。野外博物館とは、構造的及び機能的な実体として居住形態や住居、経済、技術を展示解説する様々な種類の野外にあるコレクションを有する施設を指す。

(In AEOM open air museums are defined as “scientific collections in the open air of various types of structures, which as constructional and functional entities, illustrate settlement patterns, dwellings, economy and technology”)

AEOM への参加資格は、すでに会員になっている者から 2 名の推薦を得ることというシンプルなものである。野

外博物館で働いている人は誰でも参加することができ、役職等は問わない。法人会員という考え方はなく、属人的なものである。AEOM は少なくとも2年に1回、夏にヨーロッパの野外博物館を会場に会議を開催している。

第1回野外博物館会議は、1966年にベルギーのBokrijkという野外博物館で開催された。その後は、スイス、ドイツ、フィンランド、オーストリア、スウェーデン、ハンガリー、ポーランドなどヨーロッパの野外博物館で開催されている。第27回ヨーロッパ野外博物館会議は、2015年8月24日から27日までの4日間、ノルウェーのリレハンメルにあるマイハウゲン（Maihaugen）、オスロのノルウェー民俗博物館（Norsk Folkemuseum）という2つの野外博物館を会場に開催された。この会議の内容については後述する。

3. 木造建築物の移築

3-1 移築の定義

移築を定義することは難しい。木材を建っていたとおりに再び建てることだけでなく、部材を転用して再利用することも移築と呼ばれる。鈴木博之は、『保存原論』（注2）の中で、茶室などの移築を例に挙げ、日本の木造建築文化では、場所が変わっても建物の移動とともに文化的遺産としての由緒は継承されると考えられてきたことは日本における保存と継承のひとつのかたちであると指摘しており日本における移築の考え方を的確に説明している。

文化財の修理の方法には、全解体修理、半解体修理があり、部材を一度解体して組み直す作業である点において、移築と一致する。当初から移築の意図がなくとも、全解体修理の際に、もとの敷地の範囲内で位置が移動する場合もありうる。これも移築のひとつにあたる。

ある民家が移築されたものであることを示す根拠は、部材に残る痕跡があれば明らかであるが、ずっと子孫が住みついでいる民家の場合には、古文書などから判明する場合や、言い伝えとして伝承されていることもある。

移築の研究史を見ると長岡造形大学の平山育男（注3）による民家の移築の研究をはじめ、東京大学の藤井恵介（注4）らによる『建築の移築に関する研究』等が挙げられる。

移築の歴史からみれば、建物を保存・活用するための移築は、新しい事例にあたる。保存・活用を目的として、ある建物を別の場所に移築する事例は日本各地にみられる。

一例として、東京都内の指定文化財を挙げる。東京都教育委員会が作成した『東京都文化財総合目録（都指定・国指定・区市町村）』（注5）によると、東京都指定有形文化財（建造物）全60件のうち、移築の経過が確認できるものは5件。港区増上寺経蔵、府中市郷土の森にある旧府中町役場、旧三岡家長屋門、昭島市旧三井家拝島別

邸、小金井市江戸東京たてもの園にある旧自証院霊屋が挙げられる。

国指定重要文化財（建造物）72件では、港区慶応義塾三田演説館、新宿区学習院旧正門、文京区護国寺月光殿、文京区旧東京医学校本館、台東区旧因州池田屋敷表門、旧十輪院宝蔵、旧東京音楽学校奏楽堂、青梅市旧宮崎家住宅の5件に移築の経緯をみることができる。

建物を保存・活用するための移築では、移築の前後に文化財として国、都道府県、区市町村等の指定を受ける事例が多い。

このような保存目的で民家が移築される場合には住居としての機能はなくなり「展示施設」として用途変更される。現行の建築法規では「新築」を前提としているのでさまざまな齟齬がある。また博物館等における保存のための移築であっても現行法に沿うように多くの現状変更が必要である。

3-2 移築工事報告書

建造物の保存修理にあたり、その記録が印刷物として公表された最初は、1915年（大正4）奈良大仏供養会から出された『大仏及び大仏殿史』であるという（注6）。奈良時代以来の大仏殿の歴史、明治・大正の大修理の計画およびその経過のあらましを編纂したものであるが、大仏殿修理工事の仕様や工事中特に困難であった事項についても記載がある。

その後、『東大寺南大門史及昭和修理要録』1930年（昭和5）や『法隆寺国宝保存工事報告書』1935年（昭和10）などの刊行を経て文化財建造物の修理工事に際しては、学術的な記録として報告書が作成されるようになった。

指定文化財の修理工事報告書では、当初は文化庁が示した標準仕様がある。規格はA4判、本文は縦書き、2段組み、一段は35字25行と定められていた。部数は300部作成され、各所に寄贈されていた。

現在、国会図書館で閲覧できる報告書として移築工事報告書のもっとも古い事例は、岐阜県大野郡荘川村にあった「旧矢筈原家住宅」である。1960年（昭和35年）の御母衣ダム建設により横浜市の三溪園に寄贈されることになり、同年（昭和35年）に移築された（注7）。

次は、岐阜県下呂温泉合掌村に移築された「旧大戸家住宅」において移築工事報告書が刊行されている（注8）。

また、洋風建築の移築事例として早い時期のものは、神戸市の居留地にあった「旧ハッサム住宅」である。1961年（昭和36）に文化財指定を受け、その後1963年（昭和38）に神戸市立相楽園移築された（注9）。

同じく、神戸市の「旧ハンター住宅」は1963年（昭和38）に王子動物園内に移築され、1966年（昭和41）に重要文化財の指定を受けている（注10）。

4. 現地調査

4-1 日本の代表的な野外博物館の現地調査

全国文化財集落施設協議会に加盟する 12 の野外博物館のうち、5 つの施設を訪問して調査を行った。

A 民家集落博物館（大阪府）1956 年（昭和 31 年）設立

服部緑地に飛騨白川にあった合掌造りの民家は移築されたことが設立のきっかけとなった。日本全国から移築された特徴的な民家を展示。

単体の移築の事例はこれより前にも見られるが、複数の民家が移築によって意図をもって配置されている。これにより、日本で最初の民家を中心とした野外博物館の事例とされる。

現在は、12 棟の建物が展示されている。移築後、国指定文化財となった民家は 6 棟ある。岩手県にあった南部曲屋、鹿児島県奄美大島の高倉まで、日本の民家の多様性を見ることができる。

現地調査でうかがった中で残念な点は、この当時の移築工事報告書は現在も閲覧可能は報告書の体裁で刊行されていない点であろう。

近年は、外国人観光客も増え、教育普及事業にますます力を入れている。

博物館案内



図 4-1 民家集落博物館 案内図（民家集落博物館 HP より）

B 博物館明治村（愛知県）1965 年（昭和 40 年）設立

当初は 15 棟から始まった。現在は 61 棟の建物が展示されている。

設立時より、建築専門職員を配置。日本の野外博物館を主導して現在に至る施設である。

当初は明治の洋風建築の保存から始まった収集対象は、現在は大正、昭和を含み、また木造住宅だけでなく、近代化遺産や、鉄筋コンクリート造の建物の部分移築など、事例も豊富である。

当初の移築の経過は『明治村建造物移築工事報告書 第 1 集 西郷従道邸（重要文化財 旧西郷従道住宅） 東松家住宅（重要文化財 旧東松家住宅）』（博物館明治村 編 1978 年発行）をはじめとする移築報告書としてまとめられている。

さらに 2013 年には、西園寺公望別邸「坐漁荘」の半解体修理を実施した。移築後の木造住宅の修理の事例として、他の施設が大いに参考になる事例である。この工事の経過は、『西園寺公望別邸「坐漁荘」修理工事報告書』（博物館明治村 編 2015 年 8 月発行）にまとめられている。

開館当初から現在に至るまでの経過をみると、入館者数の増減や、博物館としての教育普及事業、展示解説の設備の多様化など、明治村は今後も日本の野外博物館を主導する施設であるといえる。



図 4-2 明治村全体図（博物館明治村 HP より）

C 川崎市立日本民家園（神奈川県）1967 年（昭和 42 年）設立

現在、展示されている民家 25 件全てが国・県・市の文化財指定を受けている

発足当時から、文化財建造物保存技術協会派遣の建築専門技術職員を配置していることは非常に重要である。

原則として、民家はすべて創建当初の姿に戻している。工事記録は、『重要文化財 旧工藤家住宅移築修理工

事報告書』(川崎市 編 1972 年 3 月発行)をはじめとしてすべて工事報告書を刊行している。民家の維持管理や修理に必要な伝統的な技法の調査なども積極的に行っている。この施設での成果を全国の民家の維持管理や修理に生かしていけるようなシステムの構築がのぞまれる。

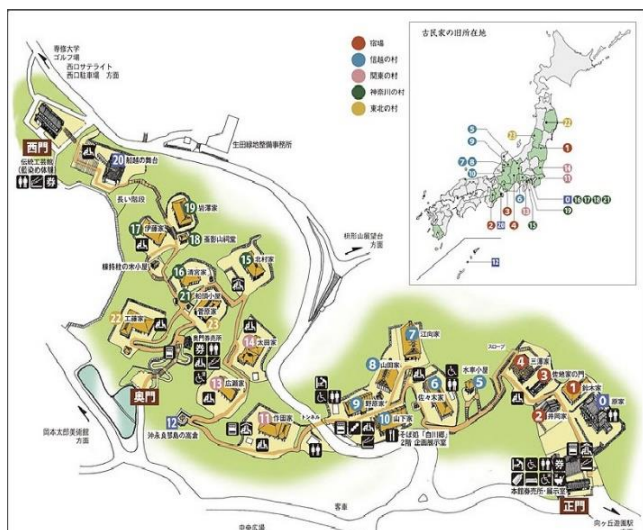
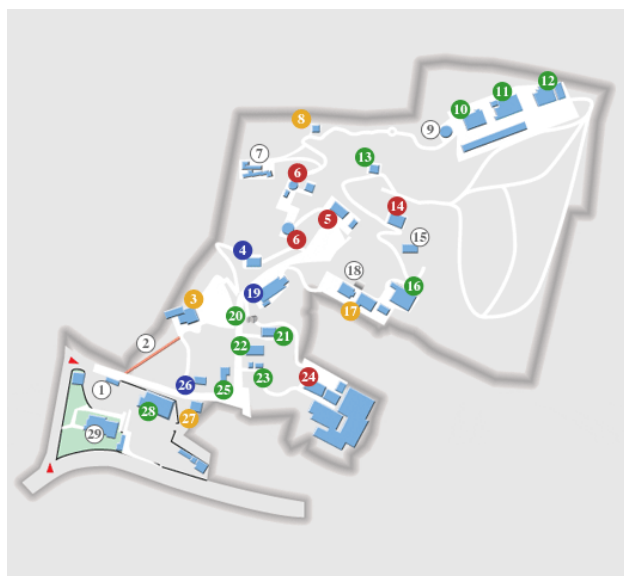


図 4-3 川崎市立日本民家園 案内図

D 四国民家博物館 四国村(香川県) 1976 年(昭和 51 年) 四国 4 県からの移築

高松で回漕業を営んでいた加藤汽船株式会社(現在はカトーレック株式会社)による設立。公益財団法人四国民家博物館による管理運営。国内外の美術工芸品の収集、展示も行っている。原則として、創建当初の姿に戻している。

『旧下木家住宅の移築工事記録』(四国民家博物館/宮澤智士 1980 年 8 月)という貴重な記録が刊行されている。



- | | |
|----------------|-----------|
| 1 浜田の泊屋(入村券売場) | 2 かずら橋 |
| 3 農村歌舞伎舞台 | 4 旧 山下家住宅 |

- | | |
|------------------|----------------|
| 5 旧 河野家住宅 | 6 砂糖しめ小屋・釜屋 |
| 7 四国村ギャラリー | 8 茶堂「遊庵」 |
| 9 旧 大久野島燈台 | 10 旧 江崎燈台退息所 |
| 11 旧 鍋島燈台退息所 | 12 旧 クダコ島燈台退息所 |
| 13 椿蒸し小屋 | 14 旧 下木家住宅 |
| 15 添水唐臼小屋 | 16 旧 久米通賢先生宅 |
| 17 旧 中石家住宅 | 18 染が滝 |
| 19 旧 丸亀藩御用蔵 | 20 アーチ橋 |
| 21 旧 福井家石蔵 | 22 旧 三崎の義倉 |
| 23 小豆島の石蔵・消防屯所 | 24 醤油蔵、麴室 |
| 25 旧 前田家土蔵 | 26 旧 丸亀藩斥候番所 |
| 27 旧 吉野家住宅(漁師の家) | 28 ティールーム 異人館 |
| 29 うどんのわら家 | |

図 4-4 四国民家博物館 四国村地図(四国村 HP より)

E 北海道開拓の村 1983 年(昭和 53 年) 52 棟
北海道百年記念事業として設立された。開拓の歴史に関する建物を収集している。

原則として移築の際、創建当初の姿に戻しているという。

移築から 30 年以上経過した建物を維持する予算が足りず、傷んだ状態そのまま修理されることなく展示され、来館者の立ち入りを禁止した建物を目にするのは衝撃的である。(可視化されるほうが北海道によって予算がつきやすいとの考えもあるという)

指定管理者制度の導入は、平成 18 年より開始。

平成 21 年 1 月には「北海道開拓の村文化財保存基金」を設立。新たな取り組みとして、2015 年より道民参加型による建造物保全活動「たてもの観まもり隊」を発足。少ない予算と人員を、工夫によって克服しようとする意欲的な姿勢は素晴らしい。



図 4-5 北海道開拓の村マップ(北海道開拓の村 HP より)

F 江戸東京たてもの園 1993 年(平成 5 年)

1993 年(平成 5 年)3 月開園。設立目的として現地保存が不可能な歴史的建造物を保存・展示することを謳っている。開園当初は 12 棟であったが、現在は 30 棟。移築工事報告書の発行は、30 棟のうち半分のみである。

移築のときの変更事項としては、コンクリートのベタ基礎への変更、消防設備の追加、バリアフリーのための設備追加、アスベストなど現在は使えない材料の変更、屋根の不燃化などが挙げられる。



図 4-6 江戸東京たてもの園配置図 (江戸東京たてもの園パンフレットより)

江戸東京たてもの園
復元建造物 旧所在地地図

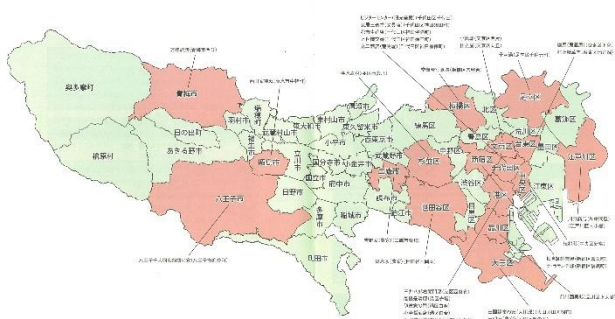


図 4-7 江戸東京たてもの園復元建造物旧所在地地図
(江戸東京たてもの園特別展「たてもの園と建築家たち」パンフレットより 筆者作成)

4-2 第 27 回ヨーロッパ野外博物館会議への参加

第 27 回ヨーロッパ野外博物館会議 (Conferences 2015: Lillehammer/Oslo, Norway) に参加して、多くの知見を得た。以下、会議の報告とする。

2015 年 8 月 24 日から 27 日までの 4 日間、ノルウェーのリレハンメルにあるマイハウゲン (Maihaugen)、オスロのノルウェー民俗博物館 (Norsk Folkemuseum) という 2 つの野外博物館を会場に開催された。欧州、北米 (アメリカ・カナダ)、オーストラリアを含む 28 ヶ国約 50 館の 120 名が参加した。

参加者の中でもっとも歴史が浅い野外博物館は、イタリア北部にある South Tyrolean Folklore Museum で、設立から約 15 年とのことであった。

2013 年 8 月に開催された第 26 回のテーマは「展示と調査研究活動における役割としての家」(The house as an exhibit and its role in research and educational work.) であり、24 カ国 58 館の 134 名の参加であった。

第 27 回の会議のテーマは「過去と現代をつなぐ」であった。基調講演、会員各館の事例報告、小テーマ別の分

科会、会場館のガイド付き見学会、滞在地の周辺施設の見学プログラムと盛りだくさんであった。

基調講演は、オスロ大学の社会学の教授 Thomas Hylland Erikson によって行われた。要旨は以下のとおり。

「ノルウェーの野外博物館は、ヨーロッパの野外博物館の中でも、積極的に現代史の展示を行っているところが多い。人類にとって、歴史を知ることが、自分たちを助けてくれる役割を果たす。そもそも、野外博物館は、古い時代のことを展示していくために始まったが、過去と現代とつなぐための努力を怠ってはいけない。農村の暮らしを残すだけでなく、都市生活の変遷を調査研究していくことが重要である。観光業との連携をふまえた経済への貢献の重要性。また、野外博物館では、多様な人々がお互いの国でどのような暮らしを営んできたのか、理解しあうためのバックボーンをわかりやすく知ることができ、室内の博物館では得られない、野外博物館では、人々が楽しい体験をしながら、さまざまなことを学ぶことができる点が重要である。その目的は、多くの民族の相互理解のためである。」

オランダのアーネム野外博物館の元館長であるピーター・ガイスパース氏の講演は以下のとおりである。

「野外博物館はユニバーサルな場所でなければならない。野外博物館の目的は、建物の保存では決してない。さまざまな人々が相互理解を深めるための展示手法を、われわれはさらに追求していかなければならない。」

これらの講演に対し、聴衆は大きくうなづいていた。

実践可能な教育的なアクティビティ、あるいは展示手法について、それぞれの経験をふまえて積極的に情報交換する分科会も準備されていた。

AEOM では Open air museum とは何かを明確に定義しているが、それに当てはまらないものを排除することはないことは、会議への参加資格からも読み取れる。それぞれの博物館のあり方が尊ばれ、多様である。会議の参加者との雑談では、お互いの Open air museum を紹介することから始めるが、「家はいくつあるか?」「動物はいるか?」

「衣装を着たスタッフがいるか?」などをまず質問された。この会議参加時、江戸東京たてもの園の学芸員であったわたしは、「わたしのミュージアムには 30 棟の家がある」と答えると、「小さいわね!」と言われることが多かった。「衣装を着たスタッフはいない」と答えると、「わたしのミュージアムも規模が小さいので、衣装を着た人形をおいている」と言われることもあった。また、収集対象が「時代性」であるか「地域性であるか」というのも重要なポイントである。「あなたのミュージアムは、日本全国から収集をしているのか?」とも聞かれ「近代以降、首都である東京にあったものに限定されている」と答えると、「地域性なのね」と納得された。

スウェーデンのスカンセンの館長が「当館は、古い設備

のままで、人を活用しながら、新しい展開をしていく方針である、ハイテクノロジーは使わない」と発表したあと、オランダのアーネム野外博物館の館長は「新しい設備をどんどん導入して、新しい展開を考えていく」と発表するなど、それぞれである。生活を営む器としての「家」の大きさは、国によってあまりに変わらないひとつのユニットであり、暮らし方を比較しながら見せる手法としての住宅展示、それを実践できるのが野外博物館であろう。

スウェーデンのスカンセンから始まったとされる、ヨーロッパの野外博物館は、建物や環境の現地保存を目的として生まれたものではないという認識を新たにした。生活の器としての住宅を、博物館に集めるように、ひとつの敷地内に移築したのが、野外博物館の始まりであろう。

木造住宅は、市内にも多数現存している。例えばスカンセンでは、ミュージアムショップで古いタイプの建築金物や、昔の塗料などが販売され、普通のお店では手に入らないものを必要とする市民がわざわざ買いに来る。また、建物の修理の講習会なども定期的に開催されている。野外博物館の活動の成果が市民の生活に還元されていることがわかる。



写真 4-1 ノルウェー民俗博物館での会議のようす

5. Open air museum と日本の野外博物館

5-1 Open air museum とは

この会議で使われている“Open air museum”と日本語の野外博物館は、イコールではないことは明らかであるが、日本に限らずそれぞれの国において、Open air museum の設立時期、他の施設との関係性によって、解釈は異なるのであろう。

日本に最初に紹介されたヨーロッパの野外博物館としては、スカンセンが挙げられるが、当時の雑誌をみると木造建築を移築・収集した建物の野外博物館であるという記事が多い。それはスカンセンを訪問し、紹介しているのは、建築関係者が多いこともその一因であると思われる。関係者から話を聞くと、スウェーデンの人にとっては、スカンセンは動物園である認識している人が多いことも

驚きであった。

また園内には古いケーブルカーが運行され、園内を周遊する観光的な要素の強い小型の電車や馬車が走っている。そして、園内には、遊園地ゾーンもあり、回転木馬や飛行塔、汽車などの遊具もある。また、広い園内には、客単価の設定がそれぞれ異なるいくつかのレストランがある。料金設定が高いのは、スウェーデンの伝統的なビュッフェ形式専門「スモーガスボード」を提供するレストランであり、カフェテリア形式の気軽なレストランが3つある。そして園内各所にある屋台では、ホットドッグやパンケーキ、サンドウィッチなどを気軽に食べることができる。

また、展示されている建物の中では、庭で飼っているヤギの乳から、スウェーデンの伝統的なチーズを手作りし、見学者に食べさせることもある。

園内のステージでは、スウェーデンの伝統的な民族楽器によるコンサートや、現代の人気のアーティストを招いた音楽のコンサートも、同じように行われている。週末になると、老若男女を問わず多くの市民が、民族衣装を着てスカンセンに集まり、イベントに参加する。

スカンセンでは「建物」「生き物」「乗り物」「食べ物」「鳴り物」(＝音楽)「着物」(＝民族衣装)のすべてが野外博物館を構成する重要な要素であることがわかる。

建物と、それに付随する庭、植栽、家畜を含めた動物を合わせて保護していくという方針を貫いている。それらはすべて、調査研究に裏付けられたものである。スカンセンは、博物館の調査研究機能と、エンターテインメント性の両立で成り立っている。

しかしスカンセンの120年余りの歴史を見ると、ずっと順調に歩んで来たわけではなく、紆余曲折を経て現在に至る。

日本の野外博物館は、日本独自の発達をしたが、ヨーロッパと違うからといって卑下する必要はなく、野外博物館の多様性といえる。野外博物館の最低条件は、生活を営む器としての「家」を展示していることなのであろう。

5-2 日本の野外博物館の良い点

ヨーロッパの野外博物館では、近代以前の伝統的な住宅のみ収集されている事例が多いが、日本の野外博物館には、明治以降の洋風建築も収集対象になっているため、収集対象が多様である。大阪の民家集落博物館は、日本全国が収集対象であったが、川崎市立日本民家園は、東日本の民家を収集するという考え方になっている。その後、四国村では、収集地域をさらに限定し四国4県にしばって収集された。北海道開拓の村は、北海道全土を対象にしており、洋風・和風を問わず、地域の特徴的な建物を収集している。

江戸東京たても園では、当初から昭和の建物が収集

対象となっていることや、地域の特徴的な建物にとどまらず、建築家が設計した住宅も収集対象としている点が、日本の野外博物館の多様性を象徴する事例であるといえる。

表 5-1 野外博物館の変遷

年代	全体の流れ	主な出来事	展示施設
		1891 年スカンセン開館	
1900	萌芽期		
	個人的収集の移築保存		三溪園(1906)
	外観のみ公開	今和次郎らがスカンセンを訪問	
1950	第1期		
	緊急避難的移築保存		武蔵野郷土館(1954)
	外観のみ公開		
1960			日本民家集落博物館(1961)
			博物館明治村(1965)
			川崎市立日本民家園(1967)
			下呂温泉合掌村(1969)
1970			高山市立飛騨民俗村(1971)
			白川村合掌づくり民家園(1972)
			長崎市グラバー園(1974)
	第2期		四国民家博物館(1976)
	緊急避難的移築保存	博物館展示の製作を請け負う展示会社の台頭	肥後民家村(1977)
	内部公開(土間など)		
1980	第3期		世田谷区立岡本公園民家園(1980)
	計画的な移築保存	地方自治体による公設民営のための財団化	北海道開拓の村(1983)
	床上公開・生活史展示		千葉県立房総の村(1986)
	積極的活用		府中市郷土の森博物館(1987)
1990			
			江戸東京たもの園(1993)
			浦和くらしの博物館民家園(1995)
			岩手県遠野ふるさと村(1996)
			みちのく公園ふるさと村(1997)
2000			

移築は、建築法規上は新築と同様の適用を受けることはメリットもある。不特定多数を対象にした公開施設として必要な構造の補強、耐震・防火・バリアフリーのための設備等を追加しやすい。スカンセンの館長が江戸東京た

もの園に来園した際、消火設備の充実に驚いていた。約130棟の建物を展示しているスカンセンは消火設備の充実が大きな課題であるとおっしゃっていた。

5-3 日本の野外博物館の問題点

最初に挙げる問題点として、野外博物館を計画するにあたり、配置を考えることは、ストーリーを作ること、もしくは演出であり意図的な行為であることを自覚しなくてはならない。ストーリーを決定する過程をきちんと記録することが重要である。あたかもその建物が移築前からそうであったかのように、来園者が感じてしまうことが多いためである。そして展示された家での暮らしぶりまでが保存の対象である。移築の一番の問題は、その建物が建てられた場所に起因する情報のほとんどが失われることである。(自然・地形・敷地内の植栽・隣接する建物との関係性など)

今回の現地調査では、具体的な移築の際の問題点を詳しく聞き取りたいと考えていたが、施設の開館から時間が経つにつれ、現在の施設担当者では、移築時の情報がほとんどないことが多い。やはり移築工事報告書の刊行は、必須事項である。また修理の履歴、移築したあとの改変の内容について、正確に把握されてないことも多い。ひとつひとつの建物において移築のときに加えられる改変行為について、事例を掘り下げたいと思っていたが、現地調査を経ても、明らかにすることはできなかった。その理由は、実際に移築工事の設計は、ほぼ外注されている施設が多いことも一因であろう。

また、移築は建築基準法上では、新築扱いとされることから、移築の際に法的な問題が起こる。そのような事例を集めたいと思っていたが上記のような理由で難しかった。

野外博物館における住宅の修理の事例が、市内において古い住宅や建物等を使い続けるためのノウハウ等の蓄積にはなっていないことも大きな問題である。

また、現状の学芸員養成課程にも問題が多い。博物館において資料収集・資料管理・展示・調査研究などを担当する専門職員が学芸員である。野外博物館に建築専門の学芸員がいる施設はわずかである。建築専門の学芸員を配置することによって展示建築物の展示内容や建築的な情報提供など、現在の大きな問題の一部分は改善できる。建築専門の学芸員が少ないのは建築学科の学生が学芸員資格を得られるシステムが少ないことも挙げられる。学芸員資格は、学芸員養成課程を持つ大学において所定の単位を取得することによって得られる。特に古建築や保存技術に精通している建築史専攻の学生が学芸員資格を得て博物館界に進出することの意味は大きい。

建築専門の学芸員の採用と同様の問題になるが、野外博物館において修復保存技術職員が配置されていないこと

も大きな問題である。

建築専門の学芸員が設計監理も担当できるならば、建築物の復原工事と内部展示に一貫性が保たれる理想的な方法である。移築工事において設計監理を担当できる美術職員（建築士）が常駐している施設は、博物館明治村と川崎市立日本民家園のみである。展示している建物の設計監理、修理の件数は、開館から時間が経つにつれてさらに重要であるため、専門職員の配置は不可欠である。

最後に、建築法規上の問題を挙げる。新築扱いとなる移築工事において、歴史的建築物の保存活用が円滑に進むよう法第3条第1項第3号の規定の適用範囲を拡大していくような動きもある。（建築基準法第3条第1項第3号の規定の運用等について（技術的助言）国土交通省住宅局建築指導課長平成26年4月1日付文書）こうした動きがさらに加速し、法の整備が進むことを望む。

6. まとめ

博物館の収蔵庫に資料を収集するように、住宅をひとつに集めることを目的として始まったヨーロッパの野外博物館。この手法は、現在世界中に広がっている。

日本では、1920年代にスカンセンが紹介されたあと、澁澤敬三をはじめ高橋文太郎、今和次郎、宮本馨太郎により、アチックミュージアムの活動が行われ、保谷市において資料の収集が始められた。この施設は1962年には終わりを迎え、国立民族学博物館の資料に引き継がれ、小金井市にあった武蔵野郷土館にも引き継がれることによって現在に至る。スカンセンを実際に訪れた研究者らによって立てられた計画は、ヨーロッパの野外博物館の理念に近いものであった。

しかし、日本の野外博物館の設立は、地方自治体や民間企業によって計画され、失われつつある木造住宅を緊急避難的に移築することで実現したのである。

日本では、野外博物館に移築をしたことによって、そのほかの建物を壊すための言い訳になっている面もあるように感じている。

現在のところ、さらなる収集予算が確保され、継続的な移築や計画されている日本の施設は、皆無に近い。しかし、ヨーロッパ野外博物館会議では、全体的には継続的な移築を前提として話が進められている。ノルウェーのマイハウゲンでは積極的に現代生活の展示を行っている。展示の考え方は2つある。ひとつは、古い住宅における現代的な生活展示であり、もうひとつは、現代に建てられた新しい住宅の移築である。収集年代については、生活に大きな変化があった、エポックの年を選ぶべきだという考えである。現在は、1970年代、1980年代、1995年の3つの違うタイプの現代生活展示を行っている。

ノルウェーの野外博物館では、現代生活の先進的な取り組みが多くみられ、スカンセンの担当者も、ノルウェーの

取り組みをぜひ取り入れたいという話をされていた。

日本では、博物館の室内で、現代的な生活の展示を行っている施設はあるが、建物そのものを移築した事例はない。現状は、移築後の住宅の修理予算すら足りてない施設が多いので、継続的な移築は難しいだろう。



写真 6-1 ノルウェー・マイハウゲン 古い住宅の台所にステンレス製の流し台が置かれている事例

野外博物館は、市民が古い建物に関心を持ち、古い建物を残す意義を伝えるための大きな役割を担っている。さらに、古い住宅の維持や補修、日常管理に関する細々とした情報の蓄積をする場となることも重要である。そのためには、文化財集落施設協議会のネットワークの強化が早急に求められる。

<注>

- (1) 新井重三（1920～2004） 秩父自然科学博物館（現：埼玉県立自然史博物館）勤務を経て埼玉大学教育学部教授
- (2) 鈴木博之『保存原論』（市ヶ谷出版・2013年発行）
- (3) 平山育男「全国における農家の移築棟数と地域性について」『日本建築学会計画系論文集』（2007年1月）「全国の移築民家における移築の行われた時代、移築の理由、移築の移動距離、移築までの期間とその相互関係」『日本建築学会計画系論文集』（2007年12月）等
- (4) 藤井恵介『文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書』（2002年-2004年）、『日本建築様式史の再構築』（『文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書』2009年-2013年）
- (5) 東京都教育委員会『東京都文化財総合目録（都指定・国指定・区市町村）』（平成26年12月発行）
- (6) 岡田英男「4 修理の技法」『新建築学体系 50 文化財建造物の保存』p.165
- (7) 『重要文化財旧矢筈原家住宅移築修理工事報告書』三溪園重要文化財建造物修理実施委員会編 1960年発行
- (8) 『重要文化財大戸家住宅移築工事報告書』岐阜県下呂町、1963年発行
- (9) 『重要文化財旧ハッサム住宅修理工事報告書』（神戸市建築

局営繕第一課編 神戸市教育委員会事務局社会教育課, 1963 年 9 月発行
(10)『旧ハンター氏邸移築工事報告書』(兵庫県教育委員会, 1964 年発行

<主要参考文献>

- (1) 渋谷 敬三「世界の野外博物館」『文芸春秋』1955 年 11 月
- (2) 「Open Air Museums(野外博物館)に関する ICOM 研究会一抄録」『博物館研究』日本博物館協会 編 1958 年 7 月
- (3) 鈴木 昭英「野外博物館一覧」『博物館研究』日本博物館協会 編. 1972 年 9 月 P. 37~44
- (4) 「I. 野外博物館」『建築雑誌』1976 年 5 月 P. 497~499
- (5) 菊池 重郎「野外博物館スカンセン上-」「野外博物館スカンセン下-」『博物館研究』日本博物館協会 編 1976 年 9 月 P. 7~12/1976 年 11 月 P. 2~6
- (6) 『民家のみかた調べかた』第一法規 1967 年
- (7) 杉本尚次「ヨーロッパの野外博物館--その民族学的・地理学的研究」『国立民族学博物館研究報告』1986 年 8 月 P. 493~592
- (8) 大原 一興 大月 敏雄 大野 敏「古民家の保存・活用のための方法論的研究--古民家の地域内保全と民家展示施設の考察」『住宅総合研究財団研究年報』1999 年 P. 263~274
- (9) 『新建築学体系 50 文化財建造物の保存』彰国社 1999 年
- (10) 大原一興『エコミュージアムへの旅』鹿島出版会 1999 年
- (11) 日本建築学会/関東支部/歴史意匠専門研究委員会『シンポジウム これからの野外博物館 その役割と可能性』1999 年
- (12) 杉本尚次『世界の野外博物館 : 環境との共生をめざして』学芸出版社 2000 年 3 月
- (13) 「2005 年度日本民俗建築学会シンポジウム報告 民家園を考える--移築保存型野外博物館の今後」『民俗建築』2006 年 5 月 P. 87~99
- (14) 落合知子『野外博物館の研究』雄山閣, 2009 年 9 月
- (15) 「特集 野外博物館」『博物館研究』日本博物館協会 編 2009 年 9 月 P. 3~11
- (16) 『日本の美術 文化財建造物の保存と修理の歩み』第 525 号 2010 年 10 月 至文堂
- (17) 岸本章『世界の民家園 : 移築保存型野外博物館のデザイン』鹿島出版会 2012 年 6 月
- (18) 中村浩, 青木豊 編著『観光資源としての博物館』芙蓉書房出版, 2016 年 3 月
- (19) 2016 年度日本建築学会大会(九州) 建築計画部門研究協議会『居住文化とミュージアムネットワークでつなぐ新しい博物館のかたち 建築計画編一』
- (20) Sten Rentzhog 『Open Air Museums. The history and future of a visionary idea』Sweden 2007
- (21) Inger Jensen and Henrik Zipsane 『On the Future of Open Air Museums (ed): Jamtli Sweden 2008
- (22) 『Open air museums Yearbook 2015: UNHEARD VOICES』2016 Old Village Sirogojno Serbia 2016

<研究協力者>

中島宏一 北海道開拓の村 館長(学芸員)
土方敏彦 みちのく公園管理センターふるさと村担当
関悦子 川崎市立日本民家園 学芸員
吉川利一 公益財団法人 三溪園保勝会
中野裕子 公益財団法人明治村 学芸員
山城 統 日本民家集落博物館 学芸員
西谷美紀 公益財団法人四国民家博物館 学芸員
Charlotte Ahnlund Berg Senior Curator
/Social History Department Skansen
Nikola Krstović Sirogojno, Srbija
Nana Meparishvili Georgian National Museum Giorgi
Chitaia Open Air Museum of Ethnography